

インド留学記

その6

闇の中で の宗教体験



東 方 研 究 会
研 究 嘱 託
保 坂 俊 司

闇は怖いものと相場はきまっている。田舎育ちのわたしは、夜になると自宅のがらんとした闇の空間、特にその闇の深い奥座敷の板戸を開けるのも憚ったものだ。

しかし、子供のころ体験した何とも表現できない闇への恐怖感は、いつの間にかわたしのなかから消え失せていた。

それは、田舎の道にも例外なく街燈が付き、冥界から湧き出たような闇の空間にめったにお

めにかかれなくなったからかもしれないし、闇というものに何の価値を認めていなかったからであろう。

ところが、一切の光をもたない空間がインドの生活の中では、未だにいたるところにあり、しかもわたしが子供のころから抱いていた闇への恐怖感とは一味異なった面を、この闇はわたしに示したのである。わたしはひさしぶりに再会したこの闇がなんだかとても懐かしく、しか

も暖かくいい知れぬ玄妙さを感じずにはいられなかった。

もちろん、わたしはその闇が「街燈が整備されていけないというような現実的な事情だけで今もインドに残された言わば、インドの前近代性を象徴しているといった意味での存在」というような消極的な意味で、この闇を懐かしく感じたくわけではない。

その闇はわたしにインドという宗教大国の、深い精神性の源を示しているように感じられてならなかった。

わたしはインド滞在中、よくあちこち歩き周りヒンドゥー教のお寺や、イスラーム教のモスク、シーク教のグルドワラなどを尋ねた。

そして、これらの施設の片隅にすわって、お参りにくる人々の姿を眺めるといふ妙な趣味を持つていた。最初のころは、単なるもの珍しさでみていたのであるが、ある時から、彼等の聖

域において示す独特の雰囲気、妙に気に掛かりだした。具体的には、その人々の眼の中に、何とも言えない静けさがかはつきりと現れていたのである。

それは一般的な解釈をすれば、彼等の神に対する心からの祈りのあらわれであったのだろうし、自我の非常に強いインド人が、唯一その強烈な自我を放下したその心のうつろなのかも知れない。彼等の目は、どれも深く澄んでいた。しかし、その闇は決して恐怖を含んだものではなかった。自己放下したその虚脱感と陶醉感、あるいは神への畏敬の念が、瞳の中に宿っていたからである。わたしはこの澄みきった黒い瞳の中に、まったく光を持たない闇の静けさを感じたのであった。わたしは、それに惹かれ、その闇の正体をつきとめたいと思った。

もちろん、この彼等の瞳の闇は、いわゆる啓蒙される以前の人間の持つ、迷蒙から湧き出し

たものではない。そんな、近代西洋の薄っぺらな人間理解では、理解しえない静けさと深さをそれはたたえていた。わたしはそれをどうしても知りたかった。しかし、なかなか理解しえなかった。ところが、或る日わたしはこのインド的闇を理解する切っ掛けを掴む体験を持った。その体験とは、友人とデリーから二〇〇キロほど離れたマトウラーのクリシュナ神の生誕地



を訪れた時のことである。その時、その友人と真夜中に寺の中を案内してもらい、大変貴重な体験をした。そうはいつても、幽霊を見たとか人玉（インドでも人玉はいて、大変恐れられている）を見たとかいうのではない。

闇の暖かさ、闇の豊かさを直感的に感ずることができたのである。それは、全くの闇夜で明かり一つない境内に、立たされた時のことであ

った。いくら目を凝らしても目の前に居るはずの友も、また昼間あれほどにぎやいだ沿道も、巨大な寺の建物も一切感じられない世界であった。闇は静かに私をつつみ全く他の存在を感じさせなかった。わたしはその時、非常な恐怖を一瞬感じた。なぜなら自らの身体の一部であるはずの手や足までも、全く目にはいらなかったからである。心の中に火のような恐怖がまるで矢のように走って目の前を真っ白に変えた。動揺した心の現れである。しかし、その時、わたしは自らの内面に同じような闇の存在を感じた。そう思った瞬間に、恐怖心は消えむしろ闇の中の自分が全く意識から消え失せたかのようになった。つまり、外の闇と内に潜む闇とが、わたしの身体をとおして混じりあっていたのである。その時わたしは妙な陶酔感にひたり、肉体を意識しない闇の世界を掛け巡っていた。なにか非常にゆったりとして落ち着いた心持ち

が、わたしのあたまの中にひろがった。そこは、時間も、空間もましてや人間社会のしがらみもない自分だけの無限の世界である。まるで酔ったときのようにもあるが、しかし頭は妙にすっきりしているのである。わたしは、これがインドの人々の宗教的世界なのではないか、と直感した。もちろん、なんの根拠もないのだがその時の体験が、その後のわたしのインド宗教理解の上で何がしかの意義をもっていることは否定できない。わたしは、インドの人々のあの妙な落ち着きは、きつとこの闇の世界から来ているのではないかといまでも思っている。

しかし、その陶酔感を破ったのは、友の差し出したライターのあかりであった。

驚くほどに小さいその光が、わたしを闇の世界から引きずり出したのであった。

(つづく)